

「グアヒラ・グアンタナメラ」の意味は？

グアヒラ・グアンタナメラは、キューバのポピュラー音楽としては、世界で最も歌われている曲でしょう。その歌詞のバージョンは、世界で150以上もあるといわれています。今一番歌われているのは、19世紀末のラテンアメリカ屈指の詩人でもあり、キューバ独立運動の指導者、使徒ともいわれるホセ・マルティ(1853—1895)の「素朴な詩」の数節です。

最近、あるイベントでこの曲を紹介することになり、みんなで歌うことができるように、歌詞を訳し、楽譜の音符に乗せようと思いました。現在日本語になっているのは、いずれも原詞のホセ・マルティの訳からずいぶん離れており、以前から、私なりに訳してみたいと思っていました。

ところで、この曲の紹介自体が、日本でもいろいろ間違っ書かれています。八木啓代さんは、「(この曲は、) キューバの国民詩人ホセ・マルティの革命詩に、ホセイト・フェルナンデスが作曲し、後にピート・シーガーが世界で紹介したことによって、ラテンアメリカ音楽の定番的なヒットとして定着した」(八木啓代・吉田憲司『キューバ音楽』青土社(2001年))と紹介されています。また、これほど、時代と事実を逆にとらえてはいませんが、長いキューバ音楽研究の蓄積のある竹村淳さんの好著でさえも「曲は、ホセイト・フェルナンデスがグアヒーラのスタイルで作り、45年に初録音。今巷で親しまれているのは、60年頃フェルナンデス自身が自作の歌詞に代え、ホセ・マルティの詩を使ったバージョンである。フェルナンデスなりの革命への共感が歌詞を代える動機となったのだろうか」(竹村淳『ラテン音楽名曲名演ベスト111』(アルテス、2011年))とあります。

しかし、事實は、このグアヒラ・グアンタナメラは、ホセイト・フェルナンデスによって1928年に作曲され*、様々な歌詞で歌われていたものに、スペイン人でハバナ在住のフリアン・オルボン(1925-1991)が、1940年代にマルティの「素朴な詩」の中の数節を取りだし、歌詞として歌ったものです(詳細は本ブログ掲載のエミール・ガルシア・メラーヤ「グアヒーラ・グアンタナメラは、どのようにつくられたか」前田恵理子訳Cuba Now January 28, 2009を参照ください)。(＊1928年と1929年と二つの説があります)

したがって、マルティの詩が、ぴったりと音符に乗っていないところが当然あります。マルティの詩そのものを格調を維持しながら翻訳するのが難しいのに、それを日本語に訳して、音符に乗せて歌おうというわけですから、かなり無謀な試みとなります。本来は、まったく新しい発想で、歌詞を創作して音符に乗せるのがいいでしょう。しかし、音楽家の保瀬弘さんの協力を得て、なんとか歌えるものを作ってみました。お役に立てれば幸いです。

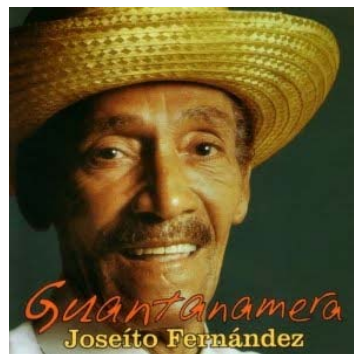
では、よく、「グアンタナモの農民の娘さん」などと訳されているグアヒラ・グアンタメラとはどういう意味なのでしょう。ひとつひとつ考えてみましょう。

「グアヒラ」とは、少しスペイン語ができる人は、「農民の娘さん」と理解します。しかし、この場合の原意は、キューバの音楽のジャンルのひとつで、農村の民謡で、「グアヒラ」と呼ばれているものです。キューバで発行された権威ある『キューバ音楽辞典』で、著者のエリオ・オロビオは、グアヒラをこう紹介しています。

ホセイト・フェルナンデス→

「農村をテーマにした田園風景的、牧歌的なキューバ生まれの音楽ジャンル。ほとんど10行詩の韻文で歌われる。グアヒラでは、4分の3拍子が8分の6拍子に変わったりする。

最初は単調で始まり、長調に移る」(Helio Orovio, *Diccionario de la Música Cubana: Biográfico y Técnico*, Editorial Letras Cubanas, La Habana, 1981)。



グアヒラが最初に作曲されたのは、1899年にホルヘ・アンケルマンによる「小川のせせらぎ」で、都会においてでした。グアヒラ・グアンタナモの作曲者のホセイト・フェルナンデスも1908年のハバナ生まれです(1979年ハバナで死去)。その後グアヒラは、別なキューバ音楽「ソン」と融合して、発達し、農村で歌われるようになります。ホセイトは、ハバナで、靴職人、新聞売り、仕立屋などの貧しい生活を送りながら、音楽界に入っていきます。もちろんグアンタナモに行ったこともなく、グアンタナモ出身の恋人をもったこともないといわれています。

ホセイトによれば、「(1928年以前のこと)ラジオ局で働いていたグアンタナモ出身の女の子(グアンタメラ)が彼に恋していて、毎日彼に食べ物をもってきていましたが、ある日、彼が別の女性と話していたのに驚いて腹を立て、食べ物を持って帰ろうとしました。そのとき、彼女を呼び止めるために彼はマイクを掴み、あのリフレインを歌った」ということです(Karina Rodríguez, *La Guantanamera: historia ¿conclusa?* Archivo Cubano, 2009)。ですから、作曲の過程からすれば、ホセイトは、「グアンタナモの女の子よ」という意味をグアヒラ調で歌ったことになります。

その後、1929年にホセイトは、グアヒラ・グアンタメラを作曲し、彼が、自分の曲としてRCAビクターに録音し、著作権を登録したのは、1941年のことで、タイトルは「私の自伝」というものでした。1943年以後ラジオのニュース番組「今日の出来事」のテーマ音楽として放送されました。そしてラジオの推理ドラマでも使われ、全国に広まります(Armando Ledón Sánchez, *La Música Popular en Cuba*, Editorial El Gato Tuerto, Oakland, 2003, Ned Sublette, *Cuba and its Music: from the First Drums to the*

Mambo, Chicago Review Press, Chicago, 2004)。この「私の自伝」の歌詞は、もちろんマルティの詩とはまったく関係がない、ホセイト独自の歌詞でした。筆者の手元には、エグレム発行のLP版、「ホセイト・フェルナンデス、グアヒラ・グアンタナメラ」(LDG-2010)がありますが、そのA面トップは「グアヒラ・グアンタナメラーホセ・マルティ詩一」で、B面トップは「私の自伝、副題：グアヒラ・グアンタナメラ」となっており、ホセイトのオリジナルの歌詞がデシマス(10行詩)で歌われています。二つともグアヒアラ・グアンタナメラという曲のタイトルとなっています。

LP版LDG-2010→

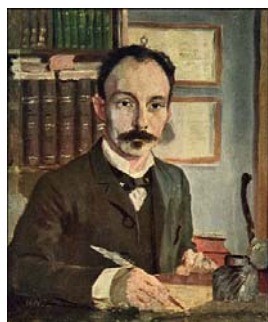


ところが、前述しましたように、この「私の自伝、グアヒラ・グアンタナメラ」の曲に、ホセ・マルティの四行詩「素朴な詩」の数節を抜き出して歌詞としたのは、ピアニストで作曲家のフリアン・オルボンでした。そのことをオルボンは、同じ作曲家で弟子のキューバ人のエクトル・アングーロ(1932-)に語っています(Alberto Dolz, *Pete Seeger no fue el primero*, Cuba Now, Jueves,, 17 de noviembre de 2011)。

フリアン・オルボン→



このホセ・マルティの詩「素朴な詩」は、1891年に作られたもので、47章に上る長いものです。1978年にキューバ音楽出版社により発行された楽譜ラファエル・オルテガ編「グアヒラ・グアンタメラー歌とピアノ」が、マルティの詩を歌詞にした公式の楽譜と考えられますが、ここでは、第1章、第3章、第5章から抜き出されたそれぞれ4行で3番までの歌詞が掲載されています。マルティの原詩が、歌詞



←ホセ・マルティ

としてまとめて1番から3番まで作られているではありません。一般には、この他にも「素朴な詩」の中から好きな箇所を抜き出して歌っている例もあります。例えば、第44章「豹には、身を守る場所がある。その乾いた枯れた色の山のなかでも。私は豹以上のものをもっている。それは、良き友だ」を最初から歌う人もいます。

しかし、この「素朴な詩」には、グアンタナモという言葉は一回もでてきません。そもそもグアンタナモとも、もちろんグアンタナモの娘さんとも無関係なのです。この詩は、1891年、キューバの独立でもって米国のラテンアメリカ支配を阻止し、ラテンアメリカの完全独立を達成することをめざしながら、その大望が果たせず、苦悩していたマルティが、医者のおすすめで静養中に自然に親しみながら書いた詩です。マルティは、この詩の中で、素朴さ、感情に流されない誠実さを表現しようとしたといっています(ホセ・マルティ「素朴な詩序文」ホセ・マルティ選集①、牛島信彦明他訳『交響する文学』(日本経済評論社、

1998年) 所収)。ここには、一般に訳されている「グアンタナモの娘さん、オレは正直な男・・・」という訳調が入る余地はありません。

ですから、オルボンが、ホセイトの曲、グアヒラ・グアンタナメラに新しくマルティの歌詞を付けて歌うようになった時には、この曲のタイトルの意味は、「グアンタナモ（農民）民謡」の意味となっているのです。 ピート・シーガー→

さて、このオルボンのバージョン、マルティの詩入りのグアヒラ・グアンタナメラをエクトル・アングーロは、1962年ニューヨークのマンハッタン音楽学校を卒業し、夏の生徒とのキャンプで教師として生徒たちに教えます。それを聞いたフォーク歌手のピート・シーガーが興味を持ち、もち歌として歌いはじめ、1963年6月8日カーネギー・ホールで歌い、一躍、この歌が世界的に有名になりました。



その後、ホセイトもシーガーも会う機会がありませんでした。ホセイトは、一度もキューバから出たこともないのです。ホセイトによれば、「愛する祖国、キューバを離れると郷愁に耐えられないからだ」ということでした。しかし、1971年シーガーがキューバを訪問し、初めて二人は知り合いました。

(2011年12月18日 岡知和)